

穢身

最近の葬儀
の会場に行き
ますと、「浄土

浄土真宗では
お浄めの塩を
用いません

真宗はお清めの塩は用いません」との看板が多く掲げられるよ

うになりました。死を穢れとみることはない仏教に携わる方々の努力の賜物でしょう。しかし、穢れとは一体どういう状態をいうのでしょうか。死でしょうか、出産でしょうか。血に関することでしょうか。

親鸞聖人の和讃に

超世の悲願ききしより われらは生死の凡夫かは

有漏の穢身はかはらねど こころは浄土にあそぶなり

(阿弥陀如来の世に越えた願いを聞かせていただいてから我々は生死に迷う凡夫ではありません。煩惱に染まるこの身には変わりませんが、心は極楽浄土を思わせていただくのです)と、あります。

穢れを外に見ていくのではありません。煩惱にまみれた我が

身に見るのです。この和讃を受けて石見の浅

原才市さんは

有漏の穢身は変わらねど 自力が他力にし

てもろて 浄土で遊ぶ 南無阿弥陀仏

と味わいました。



自己ベスト
超えし宮原に
イニタービマー
残念な結果でした
これいかに
若住身

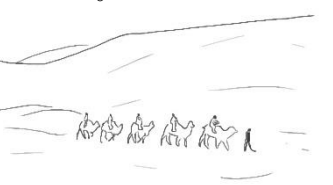
こんなところに 仏教用語

身近な仏教用語を紹介しています。

会通

昔々、一世紀、二世紀頃でしようか。シルクロードを伝つて中国に仏教が伝わりま

した。そして様々な經典の漢訳が始められました。



しかし、ここで問題が起きました。インドでお釈迦様が亡くなられて数百年が経っています。お釈迦様の説き方は、対機説法。人に応じて説き方を変えました。説法を聞いた人々がお互いに言われたことを確認すると、中には矛盾したような説き方もあります。時を経て変化していったもの、整理されたもの、お釈迦様当時の言葉が残されていたり……。これらが時を同じくして中国に伝来したのです。中国の人々は、文字に起こされたものを絶対視する傾向があります。

「すべて仏陀が説かれたものだから間違いないはずだ。矛盾している表現があるけれどもどれも仏陀が説かれたものだ」ということで、表現の違う一方を切り捨てるのではなく、調節し受け入れていく方法を取ったのです。これを会通と言います。「よく理解して渋滞しない」という意味があるそうです。

現代は違うものを切り捨てる時代になりました。会通という言葉は、經典の解釈方法だけではなく、人間関係、国家関係などでも取り入れたい言葉ではないでしょうか。

